

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第45号

平成29年4月11日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

弁の内侍、吉野西蓮華台院に入り、正行の菩提弔う

四條畷の悲歌、正行と弁の内侍

— 吉野拾遺に載る、師直の弁の内侍襲撃の件 —

● 正行、唯一のロマンス ●

3月14日の第28回例会は、2月の2人に加えて、新たな会員1人を迎えての嬉しいスタートとなりました。なお、例会終了後、更にお一人の入会がありました。

それぞれ、地元のことをもっと知りたい、正行ゆかりの地に住んでおり、楠氏のことをもっと勉強したい、などが動機での入会です。仲間が増えることは何にもましてうれしい限りです。

さて、この日は、正行のロマンス相手、弁の内侍と正行について学びました。

弁の内侍が、四條畷の合戦の後、正行の菩提を弔うために吉野山を下り、竜門山口村の西蓮華台院に入り、聖尼庵という草庵を結んで、念仏の世界に入ったことは楠正行通第42号に掲載しました。

この日は、吉野拾遺に載る弁の内侍の件を学びましたので、ここに吉野拾遺「高師直内侍を奪い取ること」の件を転載します。なお、出典は『証校日本文学大系第18巻』（国民図書株 大正14年刊）です。（写真：弁の内侍図・西蓮寺冊子より転載）

● 南朝の説話を収録した吉野拾遺 ●

吉野拾遺は、南朝（吉野朝廷）関係の説話を収録した室町時代の説話集で、二巻本と三巻本とがあります。

後醍醐・後村上天皇代の南朝廷臣の逸事・歌話を基礎とし、『徒然草』や『神皇正統記』『太平記』等から取材してこれを改変したものや、虚構の創作説話が混在し

ます。二巻本で注目すべき説話としては、高師直が弁内侍の強奪を図った話（上巻9話）、楠木正儀への復讐を果たそうとした熊王の話（下巻16話）等があります。

◆ 宗房卿葵句の事 ◆

先帝（後醍醐）の御時でございました。弁内侍というお方は、右少弁俊基（日野俊基）朝臣の娘でありました。お父上が早くにお亡くなりになり、お母上までもが出家

してしまわれたので、三位行氏卿のもとにおられました。先帝が再び御位におつきになったときより、宮仕えをするようになりました。再び世が乱れて皇居の所在も定まらなかった有様でしたが、それでも離れることなく、吉野までお出でになりました。

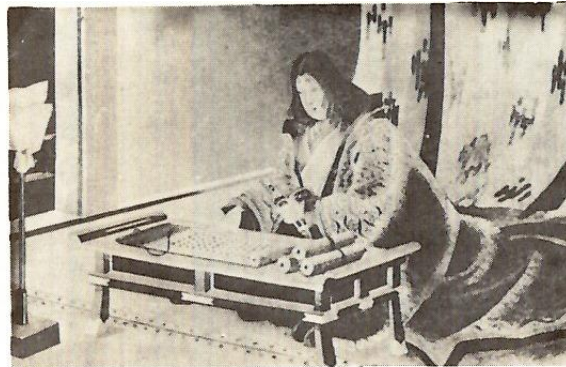
ある夜のこと、先帝の御前に中納言隆資卿、洞院実世卿、宗房卿そのほか多くの公家が集まっていた。御酒をお出ししようと弁内侍が杯や瓶子（へいし 酒器）を持って来られました。ところがどうしたことか、これを落としてしまって、真っ二つに割れてしまったのでした。先帝のご機嫌を損じてしまったようなので、とりあえず、

さかづきの われてぞ出る 雲の上

とお詠みになります。すると先帝はご機嫌をお直しになって、「誰ぞ、ついでみせよ」と秀句に取り計らいなさろうとされたので、宗房卿が、

星のくらの 光そへばや

とおっしゃいましたところ、たいそう盛り上がりまし



弁の内侍図

て、夜も明ける頃まで酒盛りが続いたのでした。そして山鳥（やまがらす）の声が聞こえたので、隆資卿が、

還幸と 鳴くや吉野の 山鳥 かしらもしろし 面白のよや

と詠まれたので、先帝はたいそう愉快そうにお渡りになっていかれました。

◆ 高の師直内侍を奪ひ取る事 一 ◆

さて、弁内侍はたいそう美貌でありました。それを武蔵守高師直がいかなる折にか、恋してしまって、気にかけるようになりました。先帝崩御の後、ひそかに手紙を送って、「ひそかにお出でなさい。迎えをよこしますぞ」と度々言って寄こします。

内侍はその返事をせずにおいたところ、師直は憎らしく思って、行氏卿をよく知っている女を探し出してきて、「北の方（行氏卿の妻）に頼みごとがあるのだ。二人で相談してくれ。願いがかなったら、見当もつかないほどの礼をしよう。三位殿の官位も進めて差し上げよう」などと北の方に言って寄こしました。

ただでさえ世の人の恐れない者はない師直の言うことであるし、たいそう期待もしましたので、手紙を準備して、内侍にお仕えしていた梅が枝という女に持たせて、「この女と相談してください」と申し上げました。師直はたいそう喜んで、生命をかけた主従の契りを結んだ武者20人ほどを選んで、梅が枝とともに吉野へ行かせました。

内侍に、梅が枝が「北の方の手紙を持って参りました」と言って、その住まいに入ります。内侍は「なつかしく思って暮らしていました。こちらへ」と招かれました。梅が枝はその手紙を差し上げます。

「はるか遠くに行ってしまうと、山里にお住まいなのは、さぞご不便なことでありましょう、と思えば、なつかしさがこみ上げてきて、涙が止まりません。住吉詣でをしようと思っておりますが、道もわかりますので、どうかお会いしたいものです。河内の国の高安のあたりに知人がおります。どうかそこへお越しください。心細い世の中で、まして乱れているので、こんな旅でもないとうどうして会えましょうか」などと書いてあって、

相みんと 思ふ心を さきだてゝ 袖にしられぬ 道しばの露

お使いの梅が枝も、手紙の趣旨をくどくど繰り返して言うので、「実の母が出家されてからは、その母にもまさる思いやりが忘れられません。朝夕なつかしく思っております」と帝に休暇を願い出て、すぐにお発ちになりました。女房2人、青侍3人がお供についていきます。

◆ 高の師直内侍を奪ひ取る事 二 ◆

途中、武者に出くわし、「『高安で待っておりますが、人目が多くてわずらわしいことになっています。住吉までお行きください。お行きになるのであれば、おまえたち、お供いたせ』と言い付かっております」と言います。そして突然多くの武者たちが出て来て輿を取り囲みます。

内侍は「なんとも合点がいきません。住吉までどうしてわざわざ行かないといけないのでしょうか。輿を帰しなさい」とおっしゃったので、青侍どもは輿を帰そうとします。武者たちは「どうか住吉までお急ぎください」と無理に連れて行こうとします。

これはかなわないと立ち止まるところへ、武者たちは輿を帰させるかと3人とも打ち殺してしまいました。内侍は大変恐ろしく、鬼に捕らえられてしまった気がしてただ泣きじゃくるばかりです。荒武者どもは、思いやりもなく「今宵のうちに住吉まで逃げ。殿もそれまでには

住吉にお着きであろう」などと、大声で騒ぎ立てます。

そうして石川というところまで来ると、楠木正行が吉野へ呼ばれて参上するのに出くわしました。正行一行をやり過ぎようと傍らの木陰に潜んでいるのを、正行は不思議に思っ

たと尋ねます。

「ある局さまが住吉詣でをなさるのです」と言うので、「そうですか」と通り過ぎようとしています。

ところが内侍が泣く声を聞きつけ、強引に輿のそばに立って尋ねますと、「こうこうなのでございます」と内侍がおっしゃったので、「これは、おかしい。こやつ等を皆捕まえよ!」と言って、残らず捕えます。縄目の恥を思った者が3、4人いて、刀を抜いて戦いましたが、ついに打ち殺してしまいました。

正行は吉野へ参上して事の次第を奏上します。梅が絵を問い詰めますと、内侍をだましたことを白状しましたので、武者どもは皆斬られて、梅が枝は尼にして、この次第を北の方へよくよく言上するように、と京へ帰したのでした。

「正行がいなければ、大変なことになるところであった。よくやってくれた」とおっしゃって、内侍を正行に与えるとの詔があったのですが、正行はお礼を申し上げて、**とても世に ながらふべくも あらぬ身の かりの契りを いかで結ばむ**

と奏上して辞退したのです。そのときは理解できなかったのですが、後に思い当たることがあって、皆正行のことを残念に思ったのでした。（写真：楠正行弁の内侍を救う図・国立国会図書館画像データより）

（文責「四條駿楠正行の会」代表 扇谷昭）

